

Kay Kaufman Shelemay. *Soundscapes*. New York: University of Illinois Press, 2001, 393p.

民族音楽学は、個々の「民族」には固有の音楽文化が存在するという暗黙の了解のもとに、伝統音楽の諸特徴を人類学と歩調をそろえながら解明することを目指してきた。しかし、これまで「伝統的」と形容されてきた音楽の多くが、人々の移動や交わりのなかで形成されてきたことが明らかになり、欧米のポピュラー・ミュージックが全世界的に流通するようになった今日、「民族＝固有の音楽文化」という民族音楽学がかつて保持していた図式的理解も転換を迫られている。

本書は、アフリカや中東において民族音楽学の調査を行ってきたアメリカ人の著者によって、北米の混沌とした音楽文化状況の動態を描くことを目的に書かれた著作である。著者が提唱する視座は、まず多様な音楽文化を水平線上に並列 (juxtapose) させ、近所の「風景」として把握することである。本書は民族という単位から音楽文化をとらえるのではなく、音楽が請け負うさまざまな社会的側面から音楽文化を照らし出しつつ、その社会的側面という共通テーマを結節点として、各章が互いに結びついた連続体となるように本全体を構成することに成功している。

ユダヤ系アメリカ人の家庭に生まれた著者シェレマイは、大学院生であった70年代前半にエチオピア北部においてフィールドワークを行い、エチオピア聖教会の賛美歌や、ファラシャと呼ばれるユダヤ教徒たちの儀礼

音楽の研究に力を注いだ。そのなかでも、謎の多かったファラシャの起源や歴史について、民族音楽学の立場からアプローチして提言を試みたことは、著者の初期の重要な仕事に数えられる。

当時のエチオピアでの著者の調査や生活の様子は、後に“A Song of Longing: An Ethiopian Journey” [Shelemay 1991] のなかで詳細に描かれている。この書は、ハイレセラシエ帝政の崩壊と社会主義政権の成立に揺れるエチオピアの様子を生々しく伝えている点においても貴重である。著者はミシガン大学で博士号（音楽学）取得後、コロンビア大学、ニューヨーク大学、ウェスレヤン大学、ハーバード大学などで民族音楽学の教鞭をとり、民族音楽学会 (The Society for Ethnomusicology) の会長もつとめた。

本書のタイトルであるサウンドスケープ (Soundscape) という言葉には、カナダの作曲家 R・マリー・シェーファーが提唱した「わたしたちに関わるあらゆる音を風景としてとらえる一音風景」[シェーファー 1986] という有名な定義があるが、本書ではこれとはひと味違った意味づけがなされている。著者も冒頭で述べているように、この用語はむしろ、理論的には人類学者アパデュライの提唱するエスノスケープ (Ethnoscape) に依拠した言葉遣いである。エスノスケープとは、人、技術、金融、メディア、思想の5つの「次元」からトランスナショナルな文化の流れを風景 (Landscape) という言葉を借りて表現する概念である [江渕 2000]。アパデュライのいう「次元」は、本書においては、たとえば

信仰、政治、アイデンティティの形成など、音楽に付与されるさまざまな社会的側面に相当している。

本書は以下のように構成されている。

序文

第1章 はじめに

第2章 日々の営みと音楽

第3章 人の移動と音楽

第4章 地域の音楽の観察

第5章 信仰と音楽

第6章 踊りと音楽

第7章 記憶と音楽

第8章 アイデンティティと音楽

第9章 政治と音楽

第10章 実社会での音楽

エピローグ

各章では、北米にみられるさまざまな音楽文化を事例としてとりあげ、演奏の場 (distinctive settings)、音楽様式 (sounds)、音楽がなされることの意味 (significances) の3点から立体的な描写が試みられている。そこでとりあげられる膨大な音楽文化の事例を、すべて詳しく紹介することは不可能なので、ここでは第3章から第9章までの内容を、各章の論点を中心にてみじかに紹介するにとどめておく。とりあげられる事例は、第9章のアメリカ先住民音楽の事例を除き、すべてがもともと北米の外で派生したといわれる音楽文化である。

第3章「人の移動と音楽」では、人々の北米への移住とともに同地へ「移植」されてきた音楽が世代を超え、あるものはその音楽様式を大きく変えながらも受け継がれてきた過

程と、今もなお受け継がれていることの意味が、移動が起こった歴史的な背景とともに考察される。移住した人々が故郷との文化的なつながりを保ったり、それを再確認したりするときに音楽演奏が重要な役割をはたすことが、中国、中東、ベトナム、アフリカ大陸からの移民によってアメリカで培われてきた音楽文化を事例に説明されている。

第4章「地域の音楽の観察」においては、ボストンやヒューストンなどを例に、アメリカの大都市の音楽文化をめぐる状況が、その歴史的背景、地理的条件とともに論じられる。ここでは、個々のエスニック・コミュニティの音楽文化に焦点を絞るという、民族音楽学にありがちなアプローチと並行して、誰もがアクセスできる公共の場での音楽イベント、たとえば、今まで民族音楽学者があまり関心を払ってこなかった西洋クラシック音楽の演奏や、地下鉄などでのストリートミュージシャンの演奏などにも注目し、それらがそれぞれの都市の音楽風景の「個性」を彩る要素であると述べている。

第5章「信仰と音楽」では、ワシントンにあるエチオピア正教会がもちいる儀礼音楽や、ニューヨークのキューバ系移民によるサンテリアの儀礼音楽などがとりあげられ、聖なる存在とのコミュニケーションを実践する際に音楽がはたす役割について議論が展開される。サンテリアはもともと、外部の人間が参加することのできない宗教儀礼であったが、1970年代以降、ニューヨークでは近代美術館や劇場などで公演されるようになってきた。本章はその音楽演奏のもつ意味の脈絡

変換が行われた過程や背景にも迫っている。また、宗教的脈絡における狭義の意味での儀礼にこだわらず、パレードやロックコンサート、スポーツイベント、オペラなど、儀礼の延長線上にありながらもっと世俗的な環境において音楽が人間におよぼす作用にも注目している。

第6章「踊りと音楽」において著者は、ダンスを音楽、身体の動き、衣装の3つの主要素から成る総体としてとらえ、それが文化を表象するうえで重要な役割を担っていると指摘する。また、ここではタンゴやボルカなどを例に、その伝播過程や舞踏スタイルの歴史的な変遷を踏まえ、ダンスが音楽同様に、それが踊られる社会状況において付加される意味合いや機能を、変幻自在に変えるものであることを明らかにしている。

第7章「記憶と音楽」では、歌詞やメロディが、特定の人物や場所、できごとを呼び起こさせ、それらを伝えたり、逆に人の潜在意識に働きかけたり、記憶を「刷り込む」手助けをしたりする作用についての議論が展開される。メキシコ系移民によるコリドー、ニューオリンズのジャズバンドによる葬式での演奏、幼児が英語のアルファベットを覚えるために歌う「ABCの歌」などが事例としてとりあげられる。さらに、シリア・ユダヤ系の人々が祝祭の時に演奏するピズモンと呼ばれる歌（アラブ諸国のポピュラー・ミュージックの旋律にヘブライ語がのせられて歌われる）を例に、アラブ・イスラエル紛争の歴史的・社会的な背景を踏まえつつ、音楽演奏が相容れない過去の記憶と現在の状況を中和

させる働きをもちうることを指摘している。

第8章「アイデンティティと音楽」では、個人や集団のアイデンティティを表象するシンボルとしての音楽について考察がなされる。ここでは、イランで生まれ、アメリカへ移住した音楽家レザ・バリ (Reza Vali) がとりあげられ、個人の音楽性がいかに構築されていくのかが議論される。室内管弦楽団のための作曲をとおして自らのアイデンティティを模索する彼の姿が、中東の音楽様式を色濃くそなえている彼の楽曲の諸特徴に関する音楽学的分析や、彼自身の生い立ちと音楽家としての遍歴などを中心に描かれている。

また集団のアイデンティティを形成する音楽のありかたのひとつとして、日本で発祥し、韓国や中国系の人たちの間でも人気があるカラオケがとりあげられる。ただし、音楽の伴奏に合せて歌うというカラオケ音楽のありかたに言及し、カラオケが内容よりも「型」を重視する日本人の美意識を反映する音楽のありかたである、と紹介するあたりは多少疑問に感じる。

第9章「政治と音楽」では、権力を誇示するためや、政治的なイデオロギーあるいはナショナル・アイデンティティを伝達する媒体としてもちいられる音楽について考察がなされる。しかし、ここでは国家などの支配権力が大衆を操作するという図式の上に議論が集中するのではなく、支配権力への抵抗手段として大衆が音楽を利用するという事実を、ヒップホップやレゲエなどを例に説明している。またその場合、歌のメッセージがメタファーや暗号といった婉曲的な形式を踏襲し

やすいことに言及している。

このように各章は個別のテーマを探究しつつ、音楽に付与される社会的側面という共通テーマとの関連において議論が展開されている。しかしながらそれは、ほんらい流動的で不規則な音楽の姿を、あるひとつの切断面からとらえたものに過ぎないといえるだろう。そのため、それぞれの章において個別テーマのもとで紹介される音楽文化の事例は、そのほとんどが他の章の事例としても置きかえ可能であることに気づかされる。たとえば政治的なメッセージを運ぶ音楽の事例として第9章で紹介されるレゲエは、場合によってはジャマイカ移民のアイデンティティを表出するシンボルというストーリーのもとで、第8章の事例に置きかえることも可能であろう。あるいは、第5章の儀礼や第6章のダンスなどのコンテキストからも語ることができるだろう。

各章のテーマは、それぞれがまとまって完結するのではなく、互いを結びつけあう結節点として音楽の社会的側面を指定することによって、音楽行為の多元的な諸相が論じられている。このような視点に立脚すれば音楽文化には、多様な人間文化をさまざまな角度から理解する鍵になる可能性があることが示唆されるだろう。

エチオピアの吟遊詩人アズマリによって受け継がれる音楽をエチオピアにおいて学び、研究を行う私は、この本を読んで、これまで

の調査がアズマリの音楽文化の特徴や特異性を記述することに注意が向かいがちであったことに気がついた。人間は静寂も含めた「音」に対する多種多様な価値観を保持してきた。著者が本書で提示したような視点をもちいれば、簡単ではないだろうが、アズマリの音楽世界をまとまったひとつの像として浮かび上がらせることも可能かもしれない。

北米の混沌とした音楽文化のありようを包括的に描こうとする著者の大胆な試みが無謀には思えず、その言葉が虚しく響かないのは、そもそも音楽が人の生活・行動様式と呼応しあう価値の体系そのものであり、人間理解の窓口として解き放たれているからにほかならない。

なお、本書において豊富な写真と事例によって紹介される音楽は、インターネット上のサイト Soundscapes webBOOK からダウンロードして聴くことができる (<http://www.wwnorton.com/soundscapes/>)。

引用文献

- 江渕一公. 2000. 『文化人類学』放送大学教育振興会.
 山口 修. 2000. 『応用音楽学』放送大学教育振興会.
 シェーファー, R・マリー. 1986. 『世界の調律—サウンドスケープとは何か』平凡社.
 Shelemay, Kay Kaufman. 1991. *A Song of Longing: An Ethiopian Journey*. Illinois: University of Illinois Press.
 (川瀬 慈, 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)